

ソ連・ロシアにおけるツーリズムの変遷に関する一考察

—— ソコロワ、ウシスキンの論考による帝政期、
社会主義政権期のツーリズムの発展 ——

The Historical Development of Tourism in Russia from Imperial Russia to the Soviet Union

—— An Overview Based on the Studies of Соколова М.В. and Усыскин.Г ——

中 子 富 貴 子

キーワード：近代ツーリズム、ロシア、ソ連、西欧化

要 旨

ツーリズムは西欧的近代化、資本主義の発展とともにその歩みがある。しかし、資本主義経済システムを採用せず社会主義体制を選択したロシア（ソ連）ではツーリズムはどのような変遷を辿ったのであろうか。ソ連国家はどのようなツーリズム政策を行っていたのだろうか。本稿ではロシア人研究者による論考をテキストとし、帝政ロシア期からソ連崩壊にいたる期間のツーリズムの変遷を概観する。

1. はじめに

ツーリズムとは極めて近代的な現象であり、ヨーロッパを起点とする産業革命、資本主義の拡大、技術革新など近代化と市場経済の発展によってその興隆はもたらされてきた。

観光学においては、人々の移動、未知の世界の開拓、中世の巡礼などを経た後の、近代におけるイギリスでのグランドツアー、トーマスクックによる初めてのツアー、旅行産業の成立等を、近代ツーリズムの歴史的成立要件とする歴史観が共有されている。

日本では第二次世界大戦後の高度経済成長時代において、可処分所得の増大、余暇の拡大が進み、観光は大衆化の一途を辿った。現代日本人にとってツーリズム、特に観光旅行は身近な生活資源ともなっている。

前世紀初頭、資本主義経済システムを採用せず社会主義体制をひいた諸国において、ツーリズムはどのような変遷を辿っていたのであろうか。本稿はその問いへの作業の端緒として、ロシア・ソ連のツーリズム変遷がどのように現在ロシアの研究者において捉えられているのか、Соколова М.В.（ソコロワ М.В.）『История туризма』（Соколова 2002）、Усыскин.Г（ウシスキン Г）『Очерки истории российского туризма』（Усыскин 2000）を主なテキストにし概観することを目的としている。

ソコロワを本稿のテキストに取り上げた理由は、現在ロシアにおいて広くツーリズム系の教科書として取り上げられ、版を重ねていること、世界的なツーリズム史を広く論じる中でロシア・ソ連のツーリズムを位置付ける作業を行っていることである。上述のような観光学における視座を共有した上でのロシアツーリズムの世界通史への挿入は、ロシアという社会を同じ地平で眺める手立てを提供する。その作業は、資本主義経済体制を過ごしてきたものにとって、ソ連社会での現象を切り離された異次元の世界とすることなく、研究の視野に組み入れるための重要な視座を与えるものである。

加えて、ウシスキンの場合は、20世紀以降のソ連時代におけるツーリズム政策を詳細に時代ごとに分析しており、ロシア（ソ連）内部の政治状況との関連が論じられているため、より詳細にロシア（ソ連）社会内部の動向が概観できる。

2. ロシア語におけるツーリズムについて

「ツーリズム/туризм」という用語はロシア語において外来語であり、ロシア語でも「ツーリズム」と発音する。この言葉がロシア語の辞書に現れたのは20世紀になってからであると、G.PドルジェンコとY.S. プトリクは述べている（Долженко, Путрик 2010）。現在では「ツーリズム/туризм」という言葉も日常的に利用され、例えば現在のロシア連邦の旅行に関する法律には「ツーリズム/туризм」が使用されている（Об основах туристской деятельности в Российской Федерации：旅行分野におけるロシア連邦基本法、1996年制定）。

カタカナで「ツーリズム」と書くようにこの言葉は日本においても外来語であり、日本語固有の「旅」、「旅行」、「観光」など様々な言葉もある。これら用語の定義については本稿の趣旨ではないため別稿に譲るが、ロシア語においても「ツーリズム」以外にも固有の言葉がある。ここではそれらの用語を挙げておく。

- ・ путешествие：広く一般的に「旅行」を意味する。探検や未知の土地に行くような行程の長い、困難をとまなう際にもこの用語は使用される。
- ・ поездка：上記と同じ意味で用いられるが、交通手段を用いて行われる比較的短い「旅行」を意味する。
- ・ поход：ハイキングや遠足、見学旅行、ツアーを指す。その他、軍事的行為、遠征などにも使用される。
- ・ экскурсия：エクスカーション、団体の見学旅行など。

本稿で参考にするソコロワ、ウシスキンは上記用語を「ツーリズム」という用語と併用している。以下、本稿ではこれらの用語を、文脈に則しながら「ツーリズム」、「旅行」、「観光旅行」等の日本語に訳し使用することにする。

3. 時代区分

まずは、ソコロワによるツーリズム通史の時代区分、そこにおけるソ連・ロシアの位置付け見てみよう。ソコロワにおける区分は以下の通り、西洋史の時代区分を基本としている。

- 1 章 古代における旅行
- 2 章 中世における旅行
- 3 章 近代における旅行の発展
- 4 章 20世紀における旅行

この西洋史区分に対応するロシアの歴史は、中世ではキエフ・ルーシとそれに続くモスクワ・ルーシの時代であり、近代では帝政ロシア期、20世紀ではソ連時代とソ連崩壊後の現代ロシアである。ソコロワはこれら3つの区分を2～4章にそれぞれ一節を設けて分析を行っている。

この中で本稿が対象にするのは、ロシアにおける近代ツーリズムが論じられている3章以降である。なお、この3章からソコロワは「ツーリズム/туризм」というロシア語をあてており、2章までの「путешествие」という言葉と区別している。

3章では、3節で18世紀から20世紀初頭までの帝政ロシア時代における近代ツーリズムの萌芽と誕生について論じている。続く4章では2節においてソ連時代、3節においてソ連崩壊後のロシア共和国のツーリズム、観光旅行について分析を行っている。

当然のことながら、ロシアのツーリズムを考察するにあたってはその背景としての世界的な政治動向を無視することはできず、前史としての植民地主義、領土拡張主義が帝政ロシアの政治支配にもたらした影響、その後のソ連時代に引き継がれた国家政策は重要な要素であり、ロシア、ソ連のツーリズムの歴史を論じるにあたっては、国家政策としての帝政ロシア、ソ連の領土拡張主義という要素を考慮しておかなくてはならない。こうした領土拡張主義等については別途項を改めて考察するが、本稿の目的は、現代ロシアのツーリズムの形態やそれを支えている構造を明らかにするために、ロシアからソ連、そして現代への展開を概観することにある。ソコロワの考察はその一つの系譜としての国家主義の影響を見るためには有益ではあり、変遷を俯瞰することが可能になる。しかし、ソコロワの論考は、世界史的な時代区分、例えば産業革命や帝政ロシアの誕生といった世界史における政治動向に着目するあまり、その考察がロシアにおけるツーリズムの歴史的特質を析出するに至っていない。従って特にソ連時代のツーリズムを見るにはそれぞれの時期の特徴を描き出すことに焦点を合わせているウシスキンの考察を加えることが有益である。

以下、本稿では、特に近代以降のロシア（帝政期、社会主義政権時代）に焦点を絞りソコロワとウシスキンの分析を概観していく。

4. 帝政ロシアに見る近代ツーリズムの源泉

17世紀から20世紀初頭にいたるロマノフ王朝支配の中で、歴史的に最も名高く、「大帝」と呼ばれるのはピョートル1世（在位1682～1725年）とエカテリーナ2世（在位1729～1796年）である。この二人の皇帝は西欧化、文明化、軍事強化を進め、ロシア社会の近代化を推し進めた。

ソコロワとウシスキンはこの時代の特徴を考察するにあたって、ピョートル1世やエカテリーナ2世自身が果たした役割に言及している。この二人の皇帝は自身が旅をすることが好きであり、このことは国家政策としてのツーリズム発展を促した一つの要素となっている。

ピョートル1世は若い頃から数学、砲術、造船術を学び、船大工や操船術も身につけていた。1697～98年にかけてロシアから派遣された「大使節団」に加わり、自らもオランダやイギリスへも赴いたが、皇帝で初めて海外にでたのは彼が初めてであった。ロシアが中世から近代に大きく移行する時代であって、自ら手本として当時の外国との間に存在した「鉄のカーテン」を破壊しようとしたのはこの皇帝である。この使節団の目的は政治的外交の他、ヨーロッパ各国の経済、学術、技術の水準に触れ、それらのロシアへの導入の可能性を図ること、文化や風俗など人々の暮らしを知ることなどであり、視察旅行としての側面を持っていた。

彼はこの後も自国に閉じこもることなく、生涯幾度も海外に出た。またロシアを訪れる外国人を案内してまわることも好きであり、客を都であるサンクトペテルブルグや、郊外の離宮へ案内し、寺院を見せ、街の状況や都市計画を語った。彼がロシアツーリズム史上最初のガイドであるとソコロワは述べている。彼は自分だけでなくロシアの近代化のために若い未成年の貴族を複数の海外に勉学のために派遣した。ピョートル1世の改革はあまりにも急激であったため彼が求めたスピードに国内の貴族は対応できなかったが、こうした勉学のための派遣や知的探求の旅行の実施は、ロシア科学アカデミーの創設など、学術的基盤の創出につながっている。ロシアで最初の総合大学であるモスクワ大学を創設し初代学長となったロモノソフも派遣されてドイツで学んでいる。このような学術探究のための旅行は限定された階層にしか開かれてはいなかったもののロシア帝政時代には広く一般化することとなる。

ウシスキンはこうした中で、個人の自発性や時間の自由裁量という視点から検討し、むしろ個人の自由裁量による旅行を推し進めたのはエカテリーナ2世であると述べている。エカテリーナ2世自身もよくロシア国内を旅行し、また貴族たちに自国の歴史や地理について興味を持たせようとした。しかし、ウシスキンの強調する彼女への評価は、貴族に対し課せられた義務をある程度緩和したことである。この時点で義務から解放された貴族たちは自由時間を持つようになり、個人の関心に従って旅に出る人々が出現したとウシスキンは述べている。

こうした皇帝自身の海外への視線は国の西欧化や文明化、学術的な発展に寄与することになったが、同時に帝政ロシア期は軍事的国家として領土拡張の時代でもあった。海外からの知識や技術の導入だけでなく、隣接地域への探検、調査が盛んに行われた。例えば、東方への探検、遠征を例にとれば、ユーラシア大陸とアメリカ大陸間の海峡（ベーリング海峡）の有無を確認したV.J. ベーリングはピョートル1世の命を受けてカムチャッカ探検隊の隊長として隊を率いた。ベーリングはデンマーク出身のロシア艦隊の司令官であったが、彼のような海軍士官以外にも、商人、学術研究者が多く「探検家」となり、ロシアの国境を越えて領土や支配地域拡張を導く「地図」を作成した。こうした人々の中で探検家として生涯を過ごした一人に博物学者のエリック・ラクスマンがいる。ソコロワは彼を、倦み疲れることのない探求者・探検家の典型として彼の生涯と功績を評価している。エリック・ラクスマンの名は、江戸時代の日本からロシアに漂着した大黒屋光太夫らとイルクーツクで親交を深め、その帰国に助力したことで日本では知られている。光太夫らが日本に帰国する際は、息子のアダム・ラクスマンが使節として同行し、幕府に対して通商の申し入れを行った。

こうした人の往来や移動を可能にするツーリズムの発展史とは、別の観点から考えれば道路の整備、宿泊所の存在、鉄道での輸送等の社会整備の発展史でもある。これらのツーリズムインフラがロシアでも整い始めたのはこの帝政ロシア時代である。18世紀には主に利用されていたのは川であったが、船の航行が可能なのはおよそロシアの川のうち3分の1程度であった。モスクワとシベリアを結ぶ大道が建設され始めたのは19世紀初頭からである。道沿いには越冬場所、馬車駅を設置した。しかしこの街道が完成を見るのはさらに半世紀後のことである。それより先にすでに整備されていた街道は、モスクワ―サンクトペテルブルグ間、モスクワ―キエフ間などであったが、それは外交文書等を送る郵便街道であった。郵便業務を行う施設は17世紀に始まったが、18世紀にはこの施設が駅通業務を行うようになり、旅行者のための宿泊所となりホテルの原型となっている。1715年には宿泊所の組織化のための庁が設けられ、ソコロワはこの時点がロシアにおける宿泊業の始まりであるとする。当然のことながら当初の宿泊所を利用したのは外国からの客が大半であり、当時の皇帝ピョートル1世も利用し客を招き、夜会を行った。18世紀後半に入るとこれらの施設では旅行者に対し地図を販売し始め、19世紀前半にはモスクワでは7施設ほどが存在していたが、19世紀後半には施設数はモスクワ以外にも広がり全体で3200ほどになり、旅行者は休息をとり馬を休めた。

帝政時代には特別の通行証が必要であり、これを持たないものは旅行ができず、乗り物の馬を借りることもできなかった。当時の旅行者にとって障害物はこのような通行証だけでなく、道路事情もちろん悪く、それにも関わらず旅行をする人口は年々増えつつあった。

その他、帝政時代に近代ツーリズムの源流として発展したのは、初等・中等学校の生徒の修学旅行、療養を目的とした旅行、登山旅行の同好会、自転車ツーリング旅行などがソコロワ、ウシスキンによって挙げられている。また、ガイドブックや新聞への海外旅行の募集案内の存在は18世紀に認められており、ある程度商業化された旅行業の萌芽も見受けられる。19世紀前半にサンクトペテルブルグと皇帝の離宮がある郊外ツァールスコエ・セローとの間に鉄道が建設されたのを皮切りに、ロシアと西欧、ロシア国内に鉄道建設が進み、大量輸送も可能になった。

ウシスキンは詳しく登山旅行のクラブ、同好会について節をたてて説明している。旅行にでかける階層は限られてはいたものの、自由な意志による同好会の存在に注目しているためである。ロシアで最初の登山同好会は1877年にチフリス（トビリシ）で設立された。自転車ツーリングクラブは、1895年にサンクトペテルブルグで発足した。当初少人数であったこのクラブはすぐにも150人を超える組織になった。このクラブはヨーロッパですでに存在したツーリングクラブを手本にしたものであった。ソコロワによると、このクラブはいわゆるエリート層男性の集まる特権的なクラブであったが、しかし記録では1911年に女性の入会が許されているようでもある。

総体としてこの時期のロシアのツーリズムは西欧に習った文明化、技術化等、西欧化の過程で影響を受けた生活スタイルや様式のひとつであった。しかし皇帝そのものが革命によって存在なくなり、特権階級は姿を消した。

5. 革命と社会主義政権時代のツーリズム

10月革命以降、約70年間の社会主義政権下でのツーリズムの進展は、いわゆる西側諸国が歩んだ歴史とは異なった様相を見せる。帝政期に設立された登山クラブや自転車ツーリングクラブは革命後に消えるか、あるいは革命政府に吸収され、本来の目的や民間主義的な特質を失っていく。

ソコロフは、V.P アントーノフ、サラトフスキーの言葉を紹介し、ソビエト的ツーリズムと西側諸国のブルジョワのツーリズムの相違について当時の理解を以下のように紹介する。ブルジョワのツーリズムとは、いつも馬鹿騒ぎで刺激や変化を求めあちこち旅行し、つまらない退屈な日常から逃避しようとする。対してソビエト的ツーリズムとは文化的な活動であり、新しい階級闘争の形であり、社会主義国家の建設の要素である。

ウシスキンはソ連時代のツーリズム史を論じるにあたり、ソコロフより詳細に年代の区分けを行っている。以下、ウシスキンの時代区分に沿ってソ連ツーリズム史を時代別に類別し、ソコロフの論考も合わせて概観する。

5-1. 革命後の初期段階 (1918-1926)

革命後の新国家への移行は内戦や混乱の中で進んだ。しかし、新政権は1918年にはすでに、ツーリズムを国民への影響力を多大に発揮するものと理解し、政権支配の重要な要素と考えていた。

1921年には旅行に関する会議が開催され、そこでは最初から旅行は地域の問題などではなく全ロシア的な国家の問題として議論された。なぜなら当然、旅行活動とは社会としての認識の問題であり、国民への教育であり、何よりもイデオロギーの問題であるべきであった。

初等・中等学校生の教育旅行は実施されていた。新しい国家にとってのツーリズムの初期発展は児童に対してまず進んだ。生徒のためのツーリズム施設が作られ、施設では生徒を受入れエクスカージョンを行った。ウシスキンはペトログラード（サンクトペテルブルグ）で19年に開設されたある施設のエクスカージョンの様子を紹介している。朝施設に着いた子どもたちはまず簡単な朝食を食べ、約3時間の野外活動を行う。海での水泳、野外競技、公園での散歩などである。昼食の後、指導者とともにエクスカージョンのまとめなどを話し合い、施設付属の博物室（その地域の自然誌や博物学の展示がされている）を見学する。このような施設は19年頃に組織的に作られ、そこでは1日のあるいは何泊かのプログラムが用意されていた。こうした施設の参加者は多く、レクチャーを行う指導者の質もよいものであった。その理由として食糧不足のこの時期にあって、政府はこうした施設に食料の提供など保護を行っていたことが挙げられる。

しかしこのような施設は24年頃までに閉鎖されていく。施設の中には政府から弾圧を受けて逮捕者が出るなど、政権の権力闘争や混乱によって影響を受けていた。

その他郷土史研究や学術調査の視点からツーリズム教育やエクスカージョンが組織され、20年代初頭に郷土史研究組織が作られたが、早々とその活動は終焉する。29～31年にかけて組織

はすべてなくなってしまう。これらの行為は「墓掘人夫」とも呼ばれ避難され、弾圧されるにいたる。

1926年12月には、コムソモール（共産主義青年同盟）モスクワ委員会は、モスクワ労働組合評議会と合同で初めての組織的旅行を行った。300人あまりの参加者を得たこの旅行の目的は、ヴォルホフ地域の水力発電所を青年たちに見せることであった。ソコロワは参加者の思い出を紹介している。そこでは、寝台列車に乗り4泊の行程に行く若者たちは、寝具の十分な準備もなく暖房も効かない列車内で過ごし、粗末な途中の駅を通り過ぎながらも、列車内は明るく賑やかで、元気よく革命の歌を歌っていたという。

5-2. プロレタリア（労働者の）ツーリズム（1927-1936）

ソ連政権成立初期は、権力闘争や組織の改編がくり返し行われた時期であり、革命直後の高揚、内戦等の混乱が過ぎると政権内で権力闘争が激しくなり、30年代にはスターリンによる権力掌握にいたる。

ウシスキンの時代区分によるこの時期は、ソ連の権力闘争が絶え間なく続いた時期であり、ツーリズム領域も同様にその影響を受けた。組織の新たな創設、弾圧や閉鎖、複数の委員会の存在と利害闘争のおかげでツーリズムの方向性はそれぞれの組織によってそれぞれの方向で進められ、この時期のツーリズム政策は「成り行き任せ」だとウシスキンは指摘している。それぞれの組織は定まったツーリズムに対する方向性を持たず、課題も認識していなかった。ある組織はツーリズムを教育であると考え、別の組織は国民の体力増強の手段ととらえ、他は休暇や休息時間、その他は祖国を知る手段であると考えていた。それぞれの組織がツーリズムを組織し、参加者を集め、ツーリスト施設を持っていた。

20年代後半から、「労働者階級のための旅行」という表現や考え方が、会議や委員会で登場し始める。新しい組織の設置、既存組織との利害闘争などを経て、ソ連労働者ツーリスト協会が作られるのは29年であり、この頃から労働者の旅行システムが作られ始める。この団体のスローガンは以下のものであった。「プロレタリアツーリズムは労働者の文化を向上させる強力な槌（推進力）である」。この組織は党や労働組合の強力なバックの下、積極的に活動を行い、創設から1年で5万人の会員を数えるまでになった。その後、他組織との合併などを経るが、36年にはこの労働者ツーリズム協会も突然活動を停止させられる。

同様の運命を辿った他のツーリズム組織も多い。1924年以降、それまで活動を続けていたツーリズム施設は徐々に閉鎖され、29年頃からは求められる役割が変わりつつあった。新しく求められたのは政治的国民教育である。階級闘争について学ぶと言った内容が目標に掲げられた。

組織化された労働者のための海外旅行－あらかじめ計画、企画化された旅行プランに人々が職場や団体を通じて参加する－は1930年頃に始まっている。最初の旅行は各地の工場から模範的労働者が集められクルーズ船によってハンブルグ、ナポリ、イスタンブールを訪れた。船では国際政治についてのレクチャーがなされ、各寄港地の地域研修資料が渡され、夜には文化芸

術の会などが行われた。

こうした流れと平行してこの時期に進展したのは、健康と体力向上を目的としたツーリズムである。32年には第1回国民保健・体育ツーリズム大会が開かれた。

ソ連時代を通じて外国旅行を取り扱っていた「インツーリスト」は1929年に設立されている。一種の株式会社の形態をとるが、組織機構としては政府の国家委員会の下部組織であり、訪れる外国人旅行者へのサービスを独占するソ連唯一の旅行会社であった。インツーリストはソ連崩壊後は旅行エージェントとして現在はロシア民間旅行会社になっている。

5-3. 第二次世界大戦前におけるツーリズム (1936-1941)

労働者ツーリズム協会の閉鎖後、ツーリズムは全ソ連保健スポーツ委員会が主導することになり組織は改編される。

39年にはツーリズム記章(バッジ)システムが作られる。「ソ連のツーリスト」の称号を正しいソ連のツーリストに与えるという主旨のランクシステムである。18歳以上のソ連国民は誰でも与えられる資格を持つが、バッジを得るには各人は約2年の間、ツーリズムについての学習や決められた内容の野外(訓練のような)研修を決められた回数をこなす必要があった。それらの研修はノルマであり、それぞれハードルの高さや日数の長さ等で、カテゴリー別に等級付けがされていた。こうしたプログラムされた訓練とノルマを段階的に果たして「ソ連のツーリスト」のバッジは与えられる。野外でのプログラムの一例を挙げると、地図を読み位置を知って移動できる、場所を選んで野営する等である。その他、旅行における衛生知識、薬の知識、地質学や植物学の基礎なども学ぶ。

戦争になるとそれまでの様々なツーリズム政策の試みや、国民の生活は旅行から離れた。しかし、これまでのプログラムで鍛えられたツーリストたちは祖国を守るために前線で活躍した。全ソ連的な運動「すべての人民は前線のために、すべては勝利のために」といったスローガンのもと行われた運動には多くの国民が参加した。例えば中央児童ツーリズム・エクスカーションキャンプの呼びかけに応じて全国のピオネール青少年は森に入り薬草やキノコ、野いちごなど自然の恵みを集め備蓄に協力した。

ソコロワは戦争前の社会状況の中でツーリズムがどのような位置を占め、どのような役割を負っていたかを整理している。まず1点目として、旅行という行為は参加者に対するプロパガンダであり、イデオロギー教育であり、実質的な社会主義国家の建設手段であった。2点目として、ツーリズムとは防衛の問題と密接に関わっていた。旅行は将来の兵士を育成するための場であり、登山や雪山でのスキー、野外オリエンテーション、水泳等、訓練が行われた。1930年代にはすでに世界大戦に突入する空気は濃厚であり、特にソ連にとっての脅威は西方のドイツ、東方の日本であった。3点目としては、ツーリストは国民経済発展のために国家に動員されるものであった。具体的には、ツーリストとして組織される国民は農場やコルホーズで種まきや収穫の手伝いをした。そして4点目として、ツーリズムは学術調査と資源採取であった。ソ連科学アカデミーが率いた大規模な全ロシア学術調査旅行などがあり、目的は資源探索である。

埋蔵されている鉱物の採取、森林での様々なデータ収集、鉱床の探索などが行われた。

ツーリズムとはこのように動員されて国家建設を手助けするものとなる。しかし、これらの行程における費用は割引や補助金によって低料金であった。

外国人旅行者は戦争前まで一定の入国数が数えられたが、戦争が始まると減少し、その後も1950年代の雪解けの時代まで増加することはなかった。

5-4. 戦争後のツーリズムの発展（1945-1956）

戦争によって国土は荒廃し、生活では物資や食料が不足していた。戦争期間、あるいは戦後の混乱期はツーリズムは国家の重要課題ではなかった。

再度復興が始まるのは40年代後半になってからである。徐々に再びツーリズム政策が始まると、最初には戦争の英雄を称える愛国的旅行プランが準備された。

戦前から始まっていた記章（バッジ）システムも再開され、それ以外にも国内スポーツ旅行や家族旅行などが一般化され始める。軍も軍人の旅行の機会や余暇の場所の提供に力を入れ始める。多くのキャンプ（保養施設）が作られ始めた。軍人の幅広い層に対する旅行提供と促進のために全ソ軍旅行会議が作られている。

戦後の混乱から徐々に抜け出し、社会主義政権が安定的支配基盤を確立するに従って、ツーリズムは国民に開かれたものになり始め、組織的、自主的旅行を問わず余暇、休息として人気のある行為となっていく。

伝統的にツーリズムの領域で重要とみなされていた初等・中等学校生徒の旅行は戦争初期の41年までは、「我が祖国ソ連」といったテーマの郷土史的な旅行が行われていた。こうした発想は50年代半ばになって復活し、ピオネール（10～15歳の児童を対象にした組織）での活動などに引き継がれた。

50年代に入ると国際旅行は労働組合の国際交流として復活する。対象は主に社会主義体制の諸国である。

5-5. ソ連における旅行クラブ（同好会）の誕生（1957-1961）

ソ連社会全体を通じて、ツーリズムの行為とは国家による計画の下、時には動員され、時には自主的に国民が取り組むよう要請され、集団的であろうとも個人的であろうとも生活の様々な局面に組み込まれた共同的関係の中でイデオロギーや党の方向性に沿って意識的・無意識的に方向付けられていたと考えることができる。しかし、労働組合が企画し提供する旅行が盛んに行われることで、一方の側面として国民の側から余暇への親しみや欲求が生まれたことも事実である。結果、自主的に余暇や旅行を楽しむ人口が増大し、愛好家が集うようになる。

ウシスキンは一例としてレニングラード（サンクトペテルブルグ）において57年に誕生した旅行クラブを紹介している。この組織は当初、労働組合の旅行施設に付属する形で作られた。クラブ会員にリュックサックや寝袋やその他、旅行に必要なものを貸し出した。また別のクラブはツーリストキャンプで滞在する際の案内書（ガイドブック）を作成した。そこにはキャン

プの場所を示す地図や周辺の案内、地図から始まりツーリストのための歌集本まで旅行に必要なあらゆるものがリストとして掲載されている。このような活動はそれまでのソ連ツーリズム史の中では初めての現象であるとウシスキンは言及している。

1958年にはインツーリスト以外にもう一つ海外旅行を取扱う組織ができた。それは「スプートニク」という、青少年対象の国際旅行の活動組織である。諸外国の青少年との交流、交換を目的とし、外貨での支払いは不要で補助金で交流旅行を促した。ソ連時代、スプートニクによって100国以上の外国の青少年とソ連の青少年は交流を行った。青少年のための国際保養施設では海外からの旅行者とソ連の若者が何日もともに過ごした。

ヨーロッパと同様の水準で外国人旅行者を迎えるためホテル、レストランの建設、多くの旅行者を受け入れるノウハウ、お土産の生産の必要性が強く意識された。1957年のスプートニク号打ち上げにより、世界中からソ連への関心が増大し、外国人旅行者が多く訪問した。しかし、冷戦の影響によりアメリカ政府はパスポートにソ連のスタンプが押してある人間（ソ連訪問経験者）には入国ビザを出さないなどの措置を行っており、そうしたせいでソ連を訪れたのは南アメリカ諸国など限られた国になった。

5-6. ツーリズム発展における新しい段階（1962-1969）

ソコロワによると、1960年代のソ連におけるツーリズムは以下の5領域があり、それぞれ異なる組織機構の指揮下にあった。

- ・労働者のツーリズム（全ソ労働組合中央評議会）
- ・国際ツーリズム（国際ツーリズム国会委員会）
- ・青少年のためのツーリズム（スプートニク／コムソモール）
- ・軍におけるツーリズム（防衛省）
- ・学校の修学旅行（文部省）

ツーリズムの業務に就く人口も増え、人材育成が必要になる。60年代にはツーリズム教育が大半の大学で取り入れ始められ、大学内には旅行クラブも作られた。大学では教育大学で学ぶ学生、特に体育教育を学ぶ学生の必須科目として導入された。体育大学でも「ツーリズム」は必須科目として導入された。学生はツーリズム理論と合わせ、5日間の野外訓練に参加する必要があった。アゼルバイジャンではソ連で初めて大学すべての学部でツーリズムを必須科目にした。

「ソ連のツーリスト」バッジ制度もさらに改変され、1から3段階に分かれ、その上に「マスターオブツーリズム」といった上級レベルも設定された。

60年代には鉄道を利用した旅行が盛んになり、さらに旅行は国民に広がり、70年代にかけて海外への国民の旅行者数も増え続けた。スターリン死後のフルシチョフによるスターリン批判、50年代の雪解けと呼ばれた変化は、政治構造と国際外交の変化であったが、結果的にツーリズムの進展を阻害することなく、国民の旅行への欲求や海外への興味が増大するのを止められず、人々の移動や国境を越えた往来を推し進めることになった。外国への旅行における厳し

い制限はソ連ツーリズムの特徴であった。またこの時期海外に渡航したロシア人は全人口の0.4%にすぎなかった。しかしそれにも関わらず海外への渡航者は年々増え続けていたのである。

1964年には政府閣僚会議の下に国際ツーリスト会議が置かれ、国際旅行の発展を担うことになった。60年代半ばにはホテルやレストラン、外国人旅行者に同行するガイド通訳の設置など新しいシステムが作られることになった。

インツーリストは以前のままソ連における唯一の商業的旅行会社として存続し、ソ連各地の80拠点で業務を行っていた。インツーリストは外国人旅行者に対応するだけでなく、ソ連人の海外への旅行にも対応した。ソ連国民が海外旅行に行く際は、各地の支部で旅行券を買い、インツーリストが海外の観光局、旅行会社とのやりとりをすべて代行する形をとっていた。

1956年から85年までの海外からの渡航者（観光以外も含める）の数値の変遷をソコロフは紹介している。それによると、1956年には48.6万人ほどであったものが、年々増加し85年には600万人になっている。しかし、このうちの60%以上はソ連と同じ政治体制を持つ社会主義諸国からの渡航者であった。西側諸国からの渡航者ではヨーロッパからが多く、中でもフィンランドからの旅行者数が最も多かった。

5-7. ツーリズムの発展の強化（1969-1990）

70年代に入ると、政府によるツーリズムの意義づけに変化が見られる。従来、イデオロギー教育としての側面が強調されていたものが、この頃から労働者の余暇やリクリエーションという意味合いが見られるようになってきた。

60年～80年にかけては、大戦前のようなイデオロギー的な強制的動員という形でのツーリズムの性格はすでに後退していた。様々な目的の旅行組織があり、それぞれの場所や時間を人々は過ごせるようにもなった。ツーリズムは国民にとって生活から切り離すことのできない重要な要素となった。しかしソ連の組織システムはあらゆる意味で需要に応えることができず、多くの旅行局は旅行券を希望者に提供できない事態にもなっていた。需要（国民の旅行への欲求）は、提供（ソ連システムによるサービス提供や施設数）を上回っていた。国民の需要に応えるため、旅行キャンプや保養施設、ホテル、レストランの建設も70～80年にかけて大規模に行われた。国民の旅行者数は規模が拡大し、各地の旅行クラブは80年代には800以上あった。90年に「ソ連のツーリスト」バッジを受領した人は25万人に登る。

加えて言うと、この時期はソ連の「ソーシャル・ツーリズム」の発展期でもあった。

社会主義が発展した国家としてのソ連は、世界で先進的な「ソーシャル・ツーリズム」の実施国であり、国民に世界で最も安い旅行を提供していると言えた。70～80年代にかけて、「ソーシャル・ツーリズム」は大きな発展を果たした。企業等で働く労働者は、その労働組合から通常の値段の30%程度の金額で旅行券を買うことができた。時にそれは90～95%の値引きの時もあった。引き下げられた分は労働組合と国が補填する仕組みである。インテリゲンチアと呼ばれる知識層は労働者よりは若干条件が悪かった。しかし知識層は例えば自分の子どもをピオ

ネール子どもキャンプに送る時には通常価格の10～20%の料金を旅行券を買うことができた。従ってソ連のソーシャル・ツーリズムには知識階級も参加していたことになる。

しかし、90年には政府はツーリズム予算を減少させる。80年代後半から始まったペレストロイカを経てソ連が崩壊するのは91年である。

ソ連崩壊とともに国のツーリズムの仕組みは消え、労働組合による組織的ツーリズムは活動を止めた。ツーリズム促進への国の関与も予算も消えた。

6. 現代ロシアと今後の課題

新生ロシアの96年には新しい法律が制定され、新たなツーリズムの段階を歩むことになった。2000年以降、ロシアには約8000の旅行会社が存在し、海外旅行の取扱を行う。しかし国内旅行だけを取り扱う旅行会社は非常に少ない。ソ連時代のようにスポーツや野外活動を取り扱う会社はほぼない。ソ連時代の国家的システムは継承されず、現在のロシアではツーリズムは多様な形態が展開されている。経済体制も資本主義経済がロシアの中に大幅に入り、むしろ現代は資本主義経済に移行したとも言われている。そのため現代ロシアのツーリズムに関しては様々な見方があり、一概に研究者に間でもその分析は端緒についたばかりである。ソ連時代のツーリズムの遺産は現在のロシアにおいてどのように継承され、文化として根付いているのか、ソコロワもウシスキンの明確な解答を提示していない。

ソ連時代には国民は自由に海外渡航ができず様々な制限の下に置かれ、「移動の自由」は保障されていなかったという認識が西側諸国には共有されている。しかし、本稿が参考としたテキストにはこの点については詳細には触れられていない。ソ連期のツーリズムにおけるこのような負の遺産については、改めて考察する必要があるだろう。

しかし、帝政ロシア時代から端を発した近代ツーリズムの流れとソ連時代に培われてきた流れは、現代ロシアのツーリズムを考察するにあたっては重要な要素となろう。また、その特徴と今後の動向を分析するにあたっては、ソコロワとウシスキンの考察はその一助となろう。

ソ連崩壊以降の分析については、稿を改めて検討したい。

参考文献

- 1) Соколова М.В.: История туризма Учеб. пособие, Мастерство, 2002
- 2) Григорий Усыскин: Очерки истории российского туризма, Герда, 2000
- 3) Геннадий Долженко, Юрий Путрик: История туризма в Российской империи, Советском Союзе и Российской Федерации, MapT, 2010